

A-5. 池作りへの取り組み「トンボがくる池をつくろう」 茨城大学教育学部附属幼稚園（茨城県水戸市）〈5歳児 6月～10月〉

昆虫に興味をもつ子どもが、保育室に飛んできたトンボが卵を産み落とす場所がないことに気付いた。そのことがきっかけとなってみんなで池作りに取り組んだのは、平成10年のことだった。しかし、年月と共に池が少しずつ涸れ始め水が減り、池の生物がほとんどいないことに気付いたことから新たな取り組みが始まった。

築山での泥団子作り、虫探しなどの遊びを続けていく中で、子どもたちが池に関心をもつような状況を教師が意識的に作っていった。今まで池には無関心だった子どもたちが、池でサカマキガイを見つけたりアメンボを探したりするようになり、子どもたちと池との接点が見られるようになってきた。

池について考える 6月1週

池に目が向けられるようになると、生き物がほとんどいないこと、雨が降っても水がたまらないことなど、池についていろいろな疑問が出てくるようになった。その疑問を皆のものとして取り上げ話し合う機会を設けながら、年長組全体の活動として池作りへの関心を高めていけるように支えていった。

「池がどうなっているか調べてみようよ」6月2週

6/9(水) ホースを引いて水を入れてもなかなか貯まらず減る一方の池の水に「どうして貯まらないんだろう？」と疑問をもち、Y男の「どうなってるのか池の周りを調べてみよう」というかけ声と共に土を削ってみたり地面から顔をのぞかせた青いビニールシートを見つけて、池の底にビニールシートが敷いてあることがわかる。「きっと、ビニールシートに穴が開いてるんだよ」「はがして作り替えれば水が漏れないんじゃないかな」と気付き始めた。

6/10(木) そこで教師は6年前に池が作られた経緯や、当時はヤゴやカエル、ゲンゴロウなどがいたことを知らせると6年前に池を作った兄がいるS子が池を作ったときの作り方を聞いてきてみんなに話した。すると「昔みたいな池にしたいね」「池を作り直そうよ」「トンボが卵を産んだり、タニシが住める池にしよう」と子どもたちの中に池を掘り起こして作り直そうという思いがふくらんできた。

しかし、作り直すことは容易なことではない。大変な作業になることが見えている教師にとって子どもたちがどこまで本気で取り組もうとしているのか、作り直すことの大変さを知らせ、揺さぶりをかけることで意欲を確かなものにし、具体的な手だてを考えていくことにした。



水がたまらないのはなぜか？
疑問をもつ

水がたまらないのは、ビニールシートに穴が開いてるかもしれないと予想する

池が作られた当時の様子を知らせる

池の作り方(仕組み)を知る
本来の池のあるべき姿を考える

作り直したいという気持ちに揺さぶりをかけ、意欲を確かめる

具体的な手だてを考える

「池を作り直そうよ」6月3週

自分たちと同じ年長組が池を作ったという話を聞いて、自分たちにもできるかもしれないという思いをもつ子どもが出てきた。池を掘るのは簡単なことではないので、手だてを一緒に考えながら具体的にイメージを描いて意欲を高めていけるように支えていった。

6/4(金) 「サカマキガイと一緒に水草もとっておこう」「池の水をそのまま入れておくと死なないよ」サカマキガイと一緒に草などの植物もバケツに移したり池の周りを囲んでいるブロックや石を運ぶ。戻すときのことを考えて同じ種類でまとめておくことにする。「これなんだろう。根っこがずいぶんはっているよ」「なかなか掘れないね」「何ていう名前か調べてみようよ」と仕事をすすめながら気付いたことを話し合っている。

6/17(月) 「石がごろごろしてる」「池を作るって大変だな。どこまでやればいいのか？」暑さも手伝って作業が進まず投げ出しそうになるが、だんだん先が見えてくるようになると友達同士はげまし合う姿が見られ「ほくも手伝うよ」遊びの合間に取り組む子どもが増えてきた。

池の中を空にしてシートをはがすと「シートってこんなふうに残ってたんだね」とシートがどのように固定されていたかわかる。



サカマキガイにとって自然に近い環境を作る工夫をする生物について知ろうとする・調べる



見通しをもつ池の仕組みに気付く

池を掘る 7月2週～9月

いよいよ池を掘る作業に取りかかった。石や植物を取り除いて、ビニールシートをはがし、毎日少しずつ、子どもたちが代わる代わる来ては掘り進めていった。その活動の中で、池の中の植物や土の性質の違いなど様々な気付きの姿が捉えられた。それらの気付きは、帰りなどの話し合いで発表しあったり、活動の様子を写真や文字で表して掲示したりして、池作りへの気持ちを持続していけるように支えてきた。

「土っていろんな粒が混じっているんだね」 7月2～3週

7/7(火) 地面を掘っているうちにT男が「見てごらん。この土光ってるよ」とD男やK男に知らせる。D男が「このところはつぶつぶがいっぱいだよ」K男は「まるめてみると粘土みたいにねばねばしてる。ここここでは土の種類が違うよ」「土の中ってこんなふうに重なってるんだ」

「いつまでも掘っていくとマグマに届くかな?」と掘っていくうちに土が層になっていることに気付き、いろいろな種類の土を虫眼鏡で観察し、大発見でもしたように夢中で話し合っている。

土の種類、違いに気付く
地面が層になっていることを発見する
さらに細かく観察する
土の性質の違い、特徴を知る



以前に取り組んだときの経験を生かす
池作りの情報を知る
モルタルについての情報を得る
(適した材料を吟味する)

池を掘る 9月

9/6(月)「もっと掘らなくちゃ」

「堅いな。なかなか掘れないぞ」「水を流しながら掘ったらどうかな」「柔らかくなると掘りやすいよ」雨上がりに掘ったときに掘りやすかったことから思いつく。

9/14(火)「ビニールシートを敷こう」

いよいよビニールシートを敷くことになった。以前作ったときにはシートの上に石を敷いただけだったこと、長年経つ間に穴が開き水が漏れるようになったことを振り返る。池作りのヒントになる情報をインターネットなどで調べることにする。

9/17(金)「モルタルを流す」

石で固定しただけでなく、側面をモルタルで固めることで水が漏れないようにすることにした。モルタルに水を入れ、ちょうどいい具合になるまで混ぜ合わせる。「早く乾かないかな」「どのくらいで固まるんだろう」「1日かな2日かな」



水を入れて池の完成 9月22日

モルタルが乾くのを待って水をくみ入れることになった。年長組で思い思いの容器に水を入れて運んだ。年長組が忙しそうに働く様子を見ていた3、4歳児も「やってもいい?」と言って手伝い始めた。年長組はできるだけ量のはいる容器を見つけてくるが、3歳児などはままごと用の小さなお茶碗だったりスプーンだったり。それでも年長組が「助かるよ」と言ってくれるので得意になって運んでいた。あふれそうになった池を前に歓声がわき上がった。

まとめ

〈子どもの学び〉

- 池として機能していない現状から再生へと思いをふくらませ、取り組みの中では池に関わる植物や生き物の生活について考える力を身につけることができた。
- 季節による変化や気象現象などより広い視点で自然界のつながりに気付くことができた。
- 教師が池周辺での子どものつぶやきや子ども同士のやりとりを拾い上げ疑問を投げかけたり情報を提示したりする中で子どもたち自身が池をどうしたいかという課題を見つけていくことができた。
- 「池を作る」という一つの課題に向かっていくことで共に学びあい、生きる喜び(達成感・充実感)を味わうことができた。

〈教師の学び〉

- 池のつくり直しの取り組みでは、教師自身も未知の事柄が多かったため子どもが考えたり共に考えていく状況を作るには教師側の十分な学びが必要であることを実感した。
- 池作りを通して知り得た知識や情報は、これからの自然とのかかわりの中に生かしていくための引き出しになった。
- 専門家(環境アドバイザー)による研修会を通して、池作りに対する新たな知識を得ることができ、次年度への計画の方向性が定まった。

ポイント

長期的に一つのことに取り組む中で、子どもたちが様々なことに気づき、経験をしています。池を掘る作業は子どもにとって重労働だったと思います。そういう長期的な活動に対して子どもの興味・意欲を持続させることは大変ですが、保育者が、子どもたちの意志を大切にしながら、子どもが具体的なイメージをもってかかわることができるように、種々の工夫をしています。